

# 漂流

吉村 昭



ひょう  
漂

りゅう  
流

新潮文庫

よ - 5 - 8



昭和五十五年十一月二十五日 発行  
平成元年九月十五日 十五刷改版  
平成三年九月十五日 十九刷

著者 吉村昭 あきら

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)三二六六一五一  
編集部(〇三)三二六六一五四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛と送付  
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Akira Yoshimura 1976 Printed in Japan

新潮文庫

漂 流

吉 村 昭 著

新 潮 社 版

2669



漂

流



## 序

高知市から国道を東に二十キロ近く進むと、右手に太平洋のひろがりが見える。そこに赤岡<sup>あか</sup>という町があり、国道沿いの墓地に小さな墓石が立っている。

それは、私がこれから書こうと思っている長平という人物の墓である。

私は、かなり以前から漂流者の記録に興味をもち、特に江戸期のものを多く読み漁<sup>あき</sup>ってきた。長平は、それら漂流者の中の一人だが、漂流者の記録を読んでいる間、私は、終戦後か  
なりの歳月をへてから南の島々で発見され、帰還してきた元日本兵のことを連想するのが常  
であった。

江戸時代の漂流者は、大半が帰国することもできず死亡している。その死の形は、溺<sup>だま</sup>死、  
餓死、病死などさまざまで、異国の地に上陸後、その地の住民に殺された者もいる。これら  
は、漂流に伴う十分に予想される死といえるが、意識して異国にとどまり、生涯<sup>しょうがいの</sup>を終えた者  
も多い。それは、かれらが幕府の切支丹<sup>きりしたん</sup>禁制の政策に恐怖を感じていたからである。

当時、幕府は、異国からの帰還者がキリスト教信者になつていてることを警戒し徹底したき  
びしい取調べをおこなった。帰還者は、持帰った品物を一品残らず押収<sup>おししゆう</sup>され、他にかくし持  
っている物はないかと、全裸にされて肛門<sup>こうもん</sup>の中まで探られた。その扱いは囚人同様で、取調

べ期間も長く、その間牢ろうに入れられたままであった。漂流者たちは、そうした扱いの末に罪をきせかけられることを恐れ、帰国の強い望みをいだきながらも、異国の地にとどまるのである。

元日本兵が終戦後南の島々に身をひそめて出てこなかった理由は、一定していないだろうが、俘虜かりよとなることを恥辱とした考え方がかれらにかなりの影響力をあたえていたことはたしかだろう。むろん、出てゆくことによつて殺されるという恐怖心もひそんでいたはずである。

流  
私が、江戸時代の漂流者の記録に興味をもつのは、突然のように姿を現わす元日本兵に対する驚きが原因なのかも知れない。それとも、戦後南の島々から出てくる元日本兵に対する驚きが、江戸期の漂流記を読みあさらせているようにも思える。江戸時代の漂流者たちと、それら元日本兵の行動、かれらを取り巻く環境は、余りにも類似点が多い。元日本兵も、戦争という激しい潮流に押し流された漂流者たちなのだろう。

終戦後、南の島々から帰国した元日本兵の中で最も強烈な記憶として残っているのは、アナタハン島からの帰還者たちであった。かれらが日本にもどつてきたのは昭和二十六年夏で、つまりかれらは終戦後六年間、日本の敗戦を信じずアナタハン島に身をひそめていたのである。

その島には、日本兵、軍属、民間人計三十一名の男と一人の婦人がいた。そして、島で生活している間に、六名が殺害され、二名が病死し、三名が原因不明の死をとげている。



私は、或る日、アナタハン島からの帰還者の一人と会った。かれは、六十六歳になると言  
ったが、皮膚はつややかで年齢よりはるかに若くみえた。その姓を、仮にPとしておく。

P氏は、炬燵を間に私と向き合って坐った。かれは、話しはじめた。

昭和十九年五月二十五日朝、横浜港を十六隻の漁船が出港した。それらは、太平洋沿岸の  
各地から海軍に徴用された鯉船で、水兵二名、軍属の漁師八名計十名ずつが乗り組んでいた。  
P氏は、一等水兵として「兵助丸」という神奈川県三崎の漁船に乗船していた。

それらの船の目的地は、中部太平洋最大の根拠地トラック諸島で、第四艦隊司令部の指揮  
下に入って、その付近に点在する多くの島々の間の物資輸送に従事することになっていた。

各船の武器は、水兵の所持する旧式の小銃二挺のみであった。

船は、鯉船特有の尖ったへさを振り立てるように進み、伊豆大島を経て南下、小笠原諸  
島で食糧を補給した。その後、各船は小集団にわかれて、さらに南へと進んだ。「兵助丸」  
は、函館で徴用された「曙丸」とともに小笠原諸島からマリアナ諸島に近づき、島づたい  
にサイパン島方面へ進んだ。

戦史によると、六月十一日にはアメリカ機動部隊がマリアナ諸島に來襲しているが、「兵  
助丸」と「曙丸」は、翌十二日早朝、二機の米軍機の來襲をうけた。米軍機は、激しい銃撃  
をくり返し、短時間で両船を沈没させ、乗組員は泳いで近くの島にのがれた。その島が、ア  
ナタハン島であった。

翌十三日、同じように米軍機の攻撃をうけた「海鳳丸」の乗員も上陸してきて、計三十名

が集まった。それは、米軍がサイパン島に上陸作戦を開始する二日前であった。

島は、東西七・五キロ、南北三・五キロで、ほとんど平坦地へいたんちはない。カナカ族の島民が約四十名いた。

「日本人などいないと思っただけでしたが、ひょっこりと日本人の男とアツッパーを着た若い女が出て来たので驚きました」

炬燵の向こうに坐るP氏は、言った。

男は農園技師で、戦局が悪化したため妻子をサイパン島に疎開そかいさせていた。また女は、南洋興発コプラ園に勤める男の妻であったが、夫は近くのバガン島にいる妹を迎えに行つたまま連絡を断っていた。

女一人をまじえた日本人三十二名が、共同生活をはじめた。食糧はタロ芋、バナナ、ヤシ蟹がに、鼠ねずみ、魚などであったが、分散して生活する方が食生活を安定させるので、気の合った者同士が二、三人にわかれて島の各所に散った。女は、農園技師の男といつの間にか肉体関係をもつようになつていて、二人で暮らしていた。

昭和二十年八月十五日、日本は連合国軍に降伏したが、アナタハン島にいる日本人たちは、戦争の終わったことを知らなかった。それまで時折銃撃にやってきた米軍機が姿をみせなくなつたことを不思議に思ったが、遠く南方のサイパン島に米軍機が爆弾を投下しているのを望見し、戦争は依然としてつづけられているのだと信じた。それは、米軍機の投弾演習であつたのである。

戦争が終り空襲が絶えると、アナタハン島に平穩な空氣がもどった。

三十一名の男と一名の女は、分散して生活していた。漂着したアメリカ製のドラムカンで雨水をためることができて、それまで最大の悩みであった飲料水の問題も解決し、ヤシ酒を作って昼間から飲む者も多くなった。かれらは、ただ一人まじっている女の存在に平靜ではいられなくなっていた。かれらは、女と同棲どうせいしている農園技師が女の夫ではないことを知るようにもなり、女を単なる女として意識しはじめていたのだ。

かれらにとって、戦争はまだ終っていないなかつた。戦場である小島にひそむかれらには、平常心を欠いた者も多かつた。

女は、天真爛漫ちんまんとも思えるほどおおらかな性格であつた。甲高い声をあげて、よく笑い、歌をうたつた。彼女は、男たちから「カズちゃん」と親しげに呼ばれていた。

終戦後一年ほどの間は、かれらの間に一応秩序めいたものはみられたが、昭和二十一年八月、農園技師と女が山中に墜落していたB 29の残骸ざんがいを発見した時から情勢は一変した。技師と女の通報で、水兵と軍属たちはその墜落現場に急いだ。かれらにとって、それは得難えがたい生活必需品を入手できる恵まれた機会であつたのだ。

パラシュートが落ちていたが、それは衣類として利用され、ジュラルミンの破片は容器、庖丁ほうちよう、剃刀かみそりなどに變つた。召集される以前新内流ししんないながしをしていた水兵は、ジュラルミン板、金屬線で三味線を作り上げたりした。

残骸の中から四挺のピストルと弾丸が発見された。ピストルはすべてこわれていたが、二

人の水兵がそれを解体し、二挺のピストルに組立てた。それらは、二人の所有に帰した。

ピストルを入手したことが、水兵の一人に強い欲望を起こさせた。かれは、五日後女の住む小舎にやってくると、農園技師に銃口をつきつけ、女を強引に連れ出して同棲した。

女は、それを強くこばむこともしなかつたが、二十三日後、その水兵は突然行方不明になった。農園技師と女は、その水兵が夜釣りに出掛けて崖の上から海に落ちて死んだのだと告げた。

「その話は信じませんでしたよ。その水兵は泳ぎが非常にうまい男で、海に落ちたからと言って死ぬような奴ではないのです。おそらく腕力の強い農園技師が、拳銃をうばって射殺したのだらうと言ひ合つたものです」

と、P氏は、私に言った。

ピストルは若い軍属がうけついでだが、かれは、一カ月もたたぬうちに再び農園技師と同居していた女のもとにやってきました。そして、無造作に技師を射殺してしまつたのである。

女は、その若い軍属と同棲したが、十カ月後、軍属も射殺死体となつて発見された。殺害者は不明であつた。

険悪な空気がひろがり、人望のある「兵助丸」の老船長の指示で、ピストルが解体され、海に投げ捨てられた。ピストルがあるために今後とも人命がそこなわれることを恐れたのである。

ピストルが海中に投棄された後は刃物による殺人がつづいた。そのような不祥事は、女の

責任ではなかったが、彼女が存在しているために起こったものであることは確かだった。

女はおおらかな性格であったので、望まればどのような男でも受け入れた。彼女は、争いが起こらぬように全員の協議で指名された男と同棲していたが、その間、他の男とひそかに情を交すこともしばしばだった。

時折り開かれる集まりで、男たちは彼女に密会の申出を手紙にかいてひそかに渡す。彼女はさりげなく承知か不承知かを答えるが、女はその折のことを、

「同棲していた男や他の男たちの目が厳しくて、私にラブレターを渡せないような時は、男が何気なく立上がるようなふりをして、木蔭から手真似で逢う月日を合図してきたりします。それに応じて、私も他の者に気づかれないように微かに首を縦にふったり、横にふったりしたものです」

と、述べている。

女の小舎は遠く、そこへ約束の日に男がやってくる。密林の中を歩いてくるので、半裸の体は傷だらけになっていた。

「その姿が憐れで憐れで、どうしても出て行って逢ってやらすにはおられない気持ちになりました」

と、彼女は告白している。

女を中心に、淫靡な生活がつづいたが、その間にもかれらに対するアメリカ軍の投降勧告はおこなわれていた。島内に日本兵が残存しているということは、同島からのがれ出た島民

たちによってアメリカ軍に伝えられていた。そのため、アメリカ軍は、飛行機からビラをまき、小舟を岸に接近させて、戦争が終ったことをスピーカーで告げさせたりした。が、アナタハン島の日本人たちは、それをアメリカ軍の謀略と考え、戦争の終結を信じなかった。

その間、女をめぐって刃物による殺人がつづき、「兵助丸」「曙丸」の両船長も病死して、三十一名の男は二十名に減っていた。

昭和二十五年四月下旬、突然女が姿を消した。

「カズちゃんが逃げ出したのは、身の危険を感じたからです。私たちの中で九人が殺されたり行方不明になっていましたが、もし彼女がいなかったら、そうしたこととも起きなかったでしょう。それで、あの女がいると今後もだれかが殺される、いつそ彼女を消してしまえ、と主張する者も出るようになったのです。それを、或る男が彼女につたえたのです。お前を殺す者がいる、と言ってね。それで彼女は恐ろしくなっ行って行方をくらましたのです」

と、P氏は、私に言った。

男たちは、手分けして島内を探したが、彼女は密林の中を巧みに逃げまわった。そして、一カ月後の五月二十三日、沖を通るアメリカ船を眼にして椰子の木にのぼり、パラシュート上の布をふった。が、米軍に射殺される不安にもおそわれてそのまま物蔭に身をひそませて海上を見ていると、船からポートがおろされて近づいてきた。そのポートには、女がサイパン島にいた頃の知人である笹本海造が乗っていて、出てくるようにうながしたので、彼女は浜に出て行った。彼女は、落下傘の布で作ったブラウスに、兵隊のズボンを縫いちぢめたパン

ツをはいているだけであつた。

その後、彼女はサイパン島に一カ月、グアム島に八日間とどまってから飛行機で日本にもどつた。

彼女の証言によつて、アナタハン島に残存している日本人の氏名があきらかになり、にわかに報道陣の注目を浴びることになった。また、救出活動も一層活潑かつぱつになり、家族たちの手紙などが同島に飛行機から投下されたり、船で海岸にはこばれたりした。そうした動きに、男たちの気持も動揺しはじめた。かれらが手にする新聞、雑誌や家族からの手紙は、すべて戦争が終つたことをしめすものばかりであつた。が、かれらは、依然としてそれらを手のこんだアメリカ軍の謀略と信じこんでいた。

かれらは、その年の十二月に全員が集まり、日本軍がやってくるまで結束を守つて同島を確保することを誓ひ合つた。そして、今後日本が負けたなどということをお口にしたりは、銃殺に処すことを決定した。

男たちは、島内に散つて生活していたが、翌二十六年六月九日、指導的立場にある下士官が単独で米軍に投降した。かれは、島に送りとどけられた妻の手紙の封筒が妻の手作りのものであることを確認、手紙に書かれていることが事実であると知つたのである。

かれは、米軍に収容された後、同僚の救出活動につとめた。小舟に乗つたかれは、スピーカーで戦争が終つたことを告げ、降伏を呼びかけた。また小型機にも乗つて、上空からスピーカーで放送もした。

かれが島から出たことは、島に残っていた男たちに衝撃をあたえた。かれらは、敗戦を信じるようになった。

アメリカ軍の救出活動は熱をおび、男たちもそれに応ずることに考えが一致した。かれらは、米軍から指定されたソクソクという海浜に集結、椰子の葉で小舎を作って寝起きし、救出の日を待った。

六月三十日、米船ココパ号がソクソク沖に姿をあらわし、二艘そくのボートがおろされた。そこには、サイパン島民政官J・P・ジョンソン少佐が、翻訳官赤谷鑑らとともに乗っていた。アナタハン島の生存者たちは、白旗をかかげて浜に整列し、ジョンソン少佐らを迎えた。かれらは、ココパ号でグアム島にはこばれた。

投降してから六日後、二十名のアナタハン島残留者は、飛行機でグアム島から羽田へ向かった。

「私たちは、アメリカ本国へでも連れてゆかれるのかと思っていました。機上から富士山を見た時、日本に帰ることができたことを知って、みな泣きました」

と、P氏は、眼をうるませて私に言った。

飛行機から降りたかれらは、家族と二百名にも達する報道陣にかこまれた。新聞、雑誌の座談会にかかれらは引きまわされ、その日は横浜引揚援護所に一泊、翌日午後二時それぞれの郷里に帰っていった。

故郷でも歓迎され帰国の喜びにひたったが、中には悲哀を味わう者もいた。



或る男の妻は、四人の子持ちであったが、二年前に男の戦死の公報が入ったので八歳下のかれの弟と再婚し、一児をもうけていた。かれの妻も弟も、かれを複雑な表情で迎えた。事情を告白された男の驚きは大きかったが、かれは冷静な態度でそれを受け入れ、最善と思われる方法で解決した。かれの妻と弟を離婚させ、かれは妻をあらためて迎え入れた。そして、妻と弟との間に生れた子供を、養子として引き取ったのである。

アナタハン島で三十一名の男の中にまじって生活していた女性も、悲劇的な道をたどった。彼女は前年に帰国していたが、夫はすでに再婚し、二人の子の父にもなっていた。孤独になった彼女に興行師の手が伸び、彼女は「アナタハンの女王」として小さな劇場をまわって歩くようになった。それは人々の好奇心をそそって評判になり、映画化もされた。が、彼女の得た物は少なく、失意のまま故郷へ帰り、アナタハンという簡易食堂をひらいたりした。その後、彼女は、二人の子をもつ男と再婚し、ようやく平穏な日々を送ることができるようになった。それから八年後、夫は死亡し、彼女はタコ焼屋を営んで生計を立てていた。店の壁には、彼女の舞台写真が飾られていた。

彼女は、ひっそりと生きてたが、昭和四十八年に病死した。年齢は、五十歳であったという。「今の若い人には、アナタハンと言っても、あなたはんという関西の言葉ですかと言われましてね。昔話になってしまったんですな」

と、P氏は、淋しさびしそうな顔をした。

私が、アナタハン島にいた女性の死を告げると、P氏は、